

# 〈「反」色好み〉的恋物語としての『苔の衣』

豊田惟子

## 一 はじめに

鎌倉時代中期に成立した中世王朝物語の『苔の衣』は、右大臣と西院の上の「第一世代」、苔衣右大将と西院の姫君の「第二世代」、兵部卿宮と苔衣中宮の「第三世代」という三代にわたる物語を、八十人を超える登場人物をもって描いた作品である。

約四十年を春夏秋冬の四巻に描いた本作については、従来「三代三部の主題の集合<sup>1)</sup>」とする見方や、「右大将夫妻の物語と兵部卿宮の物語」として前編後編に分ける見方があった<sup>2)</sup>。

これに対して、近年では、女系の血筋や親子の離別に焦点を当てたり<sup>4)</sup>、主人公を苔衣右大将と定めるなど、統一的な主題により読み解こうとする試みがなされている。しかしながら、本作で最も筆が割かれている第二世代の男女の恋物語については、十分に着目されてきたとは言えない。

『苔の衣』の冒頭は、『夜の寝覚』を改変した次の一文から始まる（以下、本文引用は、すべて前田家本系に属する伊達市開拓記念館本を底本とする『中世王朝物語全集7』所収本を用い、引用部末尾の○内に巻名と『中世王朝物語全集7』における頁数を付した。

また、傍線は引用者による）。

逢うての恋も逢はぬ嘆きも、人の世にはさまざま多かなる中に、苔の衣の御仲らひばかりあかぬ別れまで例なくあはれなることはなかりけり。

『夜の寝覚』において、冒頭の一文が物語全体に通底する主題を表すことから、『苔の衣』でも同様に主題に関わる一文として論じられてきた。文中の「苔の衣の御仲らひ」は、「ばかり」という語が、下に打消しの語を伴って、「…ほど（…なものはない）」となり、「最上のもの」として示されている。そして、「ばかりなかりけり」に挟まれるのは、「満足したわけではないのに別れた」という意味の「あかぬ別れ」という語である。本作には「あかぬ別れ」に該当する関係が多数登場するが、この冒頭文は、それら様々な別れの中でも一際際立ち「あはれ」なものが「苔の衣の御仲らひ」であると言っているのである。

また、「苔の衣」という語が僧衣を意味し、第二世代・苔衣右大将の出家場面に用いられていることから考えると、この「苔の衣の

御仲らひ」は、苔衣右大将と西院の姫君の〈仲〉以外に読み取ることはできない。本作の冒頭は、第二世代に着目して読むべきであることを指示しているのである。

第二世代の男君・苔衣右大将（以下、右大将）は、生涯一人の女性・西院の姫君（以下、姫君）を愛し、妻とした。しかし、従来の王朝物語では、男君は大抵〈色好み〉で、その色好み性に価値を見出したのこそ、王朝の世界ではなかったか。その王朝物語の系譜の上にあつて、この男君の造型は非常に特異で、〈反〉「色好み」的と言えるだろう。

以上の問題意識により、本稿では、苔衣右大将の人物像および第二世代の物語の特異性について検討する。さらに、第三世代の男君である兵部卿宮と右大将との比較を行い、第三世代の物語が苔衣右大将の独自の人物像をより明確化するのに寄与していることを述べたい。

## 二 〈反〉「色好み」的男君としての右大将

右大将と姫君の物語は、春巻末尾から秋巻末尾まで、およそ二巻にわたる。右大将は、すでに帝から入内を要請されている姫君を垣間見て恋に落ちる。そして、その入内要請をたくみに回避し、結婚する。右大将は姫君に出会う前は、幾人かの女性のもとに通っているのだが、姫君と結ばれた後は一切ほかの女性のもとに通うことをしない。さらには、帝からの弘徽殿の姫宮降嫁の要請さえ回避して、一夫一妻を貫き、その生涯で姫君以外の女君を愛することがないのである。これは、王朝物語に描かれる男君としては特異な造型である。

〈色好み〉とは、「王朝時代において、好色生活を享樂する多情な人をいう。色好みは文芸に縁の深い王朝貴族の社交壇にあつては、一つの風俗の価値であつて、天下の色好みといわれる人もおり、彼らは異性を引きつけるあらゆる資質と才能を持つていて（以下略）」とされているように、女性との交渉にばかり心を奪われているような人ではなく、恋を風流に楽しむ人のことを指した。そして、それは平安の王朝の社会において、一つの価値として認められていたのである。

理想としての「色好み」には、「様々な女性と関係を持ちながら、その生活を滞りなく運営し、誰も不幸にしない」ということが求められていた。<sup>9)</sup>その理想を体現しているのは、光源氏である。しかし、光源氏以降の男君は、「理想の色好み」の男君ではなくなっている。「宇治十帖」の主人公薫は、思いを寄せた女性と結ばれないばかりか、関係を持った女性に不幸な結末を齎してしまっている。『狭衣物語』の主人公狭衣大将も、複数の女性と関係を持つという色好みの要素は継承するものの、女性を不幸に導くし、『夜の寝覚』の男君も複数の女性と関係を持つが、男君の優雅で積極的な交渉を描いているとは言い難い。光源氏以降の男君は、光源氏のように、「求められれば老若美醜を問わず関係を持つ」ことはなく、複数の女性と関係を持ちながらも、一人の女性に執着している。また、「関係を持った女性を不幸にしない」どころか、不実な対応によって不幸へと導いたり破滅させたりしてしまう。

『源氏』の後、「色好み」は徐々に変質し、「複数の女性と関係を持つ」という要素を残す程度にまで衰退したのだ。このような〈衰退した〉「色好み」への変容について、中村真一郎氏は、撰関期から

院政期に移行する時代状況の影響を指摘する。現実在即して考えると、それまでの風習や制度を引き継がず、独裁的な政治が後宮においても發揮され、「色好み」は段々と淫靡に、動物的になって、優雅さを失っていったというのである。

中世王朝物語において、光源氏ほどの色好みな造型の男君は確かに珍しいのであるが、それにしても、右大将ほど色好みから外れた男君が主人公となったことは、それまでなかった。

右大将の特異性を八月十五日の管絃の帰路に弘徽殿の姫宮を垣間見た場面で確認してみよう（秋巻・一四七）。「宴の帰路」に「弘徽殿の細殿」の戸口が空いていたことから垣間見が発生する点で、『源氏物語』花宴巻が想起される。『源氏』では朧月夜との逢瀬へと繋がるが、本作では垣間見が恋に発展しない。女君に心動かされることなく、その場を立ち去る自らのことを「我ながらいみじき聖心なる」と述べているため、この行動が普通ではないことは右大将自身も作品も理解していると言える。

垣間見は物語においては恋の契機として意図的に描かれるもので、脈々と受け継がれた一つの様式である。王朝物語において、恋愛の重要な装置であった垣間見を無効化する本作は、王朝物語の伝統を逸脱している。

この場面で、右大将は琴の音に惹かれて垣間見に至っている。「琴の音」といえば、西院姫君を垣間見たときに、男君を惹きよせたのも「琴の音」であった。この垣間見の場面で、読者にはその出会いの場面が想起されるのではないだろうか。右大将の弘徽殿の姫宮垣間見は、むしろ西院姫君を思い浮かべさせるはたらきをしているのだ。光源氏は藤壺を求めていたにも関わらず朧月夜と関係を持った

が、右大将は西院姫君を中心に描き、西院姫君以外の相手と遭遇しても関係を持たなかった。この点が光源氏と対照的である。色好みの性格を付与される光源氏に対して、右大将は徹底して色好みのな性格が排除されていると言える。

もう一つ、彼の特異な点として、「弘徽殿の姫宮降嫁要請」をめぐる経緯に着目したい。この要請は、先帝冷泉院が出家に際して、後に遣される弘徽殿腹の姫君の将来を案じて、右大将との結婚を望んだことに始まる。冷泉院から降嫁の話を持ち出された子・三条帝は、右大将の姫君への愛情の深さを知るゆえに辞退するだろうと予測した。その上で、予測される右大将の態度を批判的に語りながら「実際に姫君に会えば連れ添う気になるだろう」と、自らの〈好色性〉を右大将に投影して判断している。

この降嫁要請については、『源氏物語』における女三の宮降嫁の流れを踏襲していることが指摘されている。『源氏物語』において、降嫁要請は出家を目前にした朱雀帝が後に遣る姫君の身を案じたことから始まっている。その後の流れや表現にも一致が見られるものの、最終的に降嫁がなされる『源氏物語』と、なされない『吾の衣』とでは大きな相違がある。

『源氏物語』では、女三の宮の降嫁先として、まず夕霧の名があげられる。しかし、夕霧は「まめ人」で雲居の雁に夢中であることを理由に候補から外される。その代わりに浮上したのが光源氏である。光源氏の名を挙げた女三の宮の乳母は、「かの院こそ、なかなかなほいかなるにつけても、人をゆかしく思したる心は絶えずものさせたまふなれ。その中にもやむごとなき御願ひ深くて、前斎院などをも、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ」と述べる。光源氏は

好色で榮達への欲を持った人物として女三の宮の婿にふさわしいと

されている。榮達の欲についてはあくまで第三者の噂話として語られるにすぎないものの、光源氏が降嫁については断りながら、女三の宮が藤壺中宮の姪であることを理由に段々と心を動かし、最終的には妻として迎える展開を考えると、好色の方は、間違いなく彼の造型の一つであると言えるだろう。これは、最後まで他の女君を拒む右大将とは大きく異なる。

『吾の衣』では、降嫁は最後まで成立しない。その要因は姫君の死で降嫁が延期され、姫君が夢枕に立ったことで、右大将が出家を決意したことである。他の女君に目移りすることなく、姫君の死後も妻を思つて嘆き続ける右大将の姿勢に、姫君は夢枕に立たざるを得なくなる。つまり、右大将の出家の決意さえも、彼の「反」色好み」の造型によつて導かれたと言える。

この降嫁要請をめぐるのは、大将の父・閔白の態度も特異である。帝からの要請であるために逃れられないとしながらも、右大将に対して同情的である。三条帝から右大将の父・閔白に降嫁の要請がなされた時には、次のような反応を示す。

内裏には、殿の参り給へるに、このことを忍びて御気色あるに、「またいかにぞや」と煩はしく心苦しく思さるれど、いかでかさばかりのことを否と申し給ふべき。いとかたじけなきよしのみ畏まりて出で給ひて、大将殿に「かかることなん」とほめめかし給ふに、いかでかは良しと思されん。(中略)いとむつかしく胸痛く御答へもせられ給はぬを、理といとほし。「宮と聞こゆとも、まことにあの有様にえ優り給はじ」と、上は心

苦しう見きこえ給ふ。(秋・一三四)

皇女の降嫁は、天皇家との関係が密接になり、家の繁栄にはプラスとなるにも関わらず、父母ともに息子に同情的で、「宮様といえども、姫君を超えることはできないだろう」と思っている。最終的には、三条帝の度重なる催促によつて、父・閔白も右大将に催促めいたことを言い出すが、基本的に、恋愛の前に立ちほだかる権力に対して、〈家〉が率先して〈個人〉の側に立ち、同情的な態度をとつている。姫君への入内要請の際には、その回避に協力的でさえある。こうした〈家〉の態度は、本作の大きな特色と言える。

従来の作品では、〈家〉はむしろ恋の障害として描かれたものであったはずだ。しかし、『吾の衣』は、〈家〉が恋の障害に男君と共に立ち向かい、一夫一妻という、当時としては特異な恋の形を後押しして達成させており、従来の型を覆している。

本作では、帝の権力が臣下の恋に対して妨げとして機能していない。また、帝の要請に応じること得られたはずの榮達に〈個人〉が無関心で、〈家〉も〈個人〉の事情に同情的である。『吾の衣』という作品も主人公右大将も、世俗的な権力の獲得に価値を見出していないのである。そもそも、従来の作品の「色好み」な主人公たちにおいては、恋物語が政治的な事情と共に描かれてきたし、最終的には何かしらの形で権力を獲得して、榮達してきた。色好みと権力志向は並行して存在するものだったのである。しかし、本作は、特に第二世代においてそのいずれをも描いていない。こうした世俗への無関心も含めて、右大将は従来の男君とは異なる「反」色好み」の男君といえる。

さて、先述した通り、降嫁要請が達成されなかったのは、右大将の出家が大きな要因である。しかし、右大将は、降嫁を回避するために出家をしたわけではない。出家はあくまでも女君の供養のためである。女君の死後、悲しみに暮れる右大将の夢枕に姫君が立ち、右大将の悲しみの深さが苦しいと訴える。右大将は、いつまでも思ひ悩まないようにしようと思を入れ替へ、「終に思ひ染にあい本意叶ひて、涼しきさまに見なしきこえたらんに、この世には嬉しかるべき」(秋・一六九)と、女君が極楽往生を遂げられたならば喜ばしいことだとする。その直前の場面では、右大将が「如説修行於此命終」という一節を口にしてゐる。これは『法華経』「葉王菩薩品」に「若シ如来ノ入滅後、後ノ五百歳ノ中ニ、若シ女人有リテ是ノ經典ヲ聞キ、説ノ如ク修行セバ、此ニ於テ命終シ、即チ安樂世界ノ阿弥陀仏ノ大菩薩衆ニ繞セラレテ、住スル処ニ往キテ、蓮華中ノ宝座ノ上ニ生レ<sup>14</sup>」と見える女人往生に関する記述の一部であり、ここから男君が女君の極楽往生を心から願っていることが読み取れる。その直後に、右大将が両親について「今幾夜かは見奉るべき」と思いを巡らせているため、ここで出家を決意したと理解できる。右大将は女君が夢枕に立ったことをきっかけに、悲しみ悩む心を改め、仏道に専念しようとしているのだ。

仏教に心を寄せる男君の姿は、「宇治十帖」の薫から始まり、多くの王朝物語に描かれてきた。しかし、その多くは、抽象的な信仰や逃避の手段として示されたり、仏道に傾倒しながらも仏道から外れた行いに走っていたりする。それに対して、右大将は、女君の供養を目的として出家し、仏教が血肉化したものとして描かれる。冬巻では、出家の後も俗世に姿を現すことなく、ひたすらに修行に励

む様が描かれている。物語の最後に、右大将は神仏の言葉に導かれて兵部卿宮の死霊を調伏しに都へ戻るが、それまでに重ねた修行によって調伏が成し遂げられていることを考えると、その信心深さは王朝物語に描かれる男君の中でも群を抜いている。

本作は、従前の物語とは異なり、血肉化した仏教の在り方を男君を通して描いている。その描写にも、多くの仏語を用いており、右大将の造型が仏教性を軸としていたことは明らかで、この点も右大将の人物像の特異性と言える。

### 三 冬巻・兵部卿宮の造型と役割

冬巻では、右大将の娘・苔衣中宮と兵部卿宮を中心とした第三世代の物語が描かれる。兵部卿宮は苔衣中宮に思いを寄せつつ、内大臣の中の君と結婚し、姉姫君とも関係を持っていて、〈色好み〉の要素を備えた男君であると言える。兵部卿宮と関係を持ち、妊娠した姉姫君は、苦悩の末に出家して出産し、死去する。兵部卿宮はこの苦悩に気が付くこともない。また、兵部卿宮は、苔衣中宮に対する執着から、死霊となって彼女に憑りつく。兵部卿宮の造型は、一人の女性に執着しつつ、複数の女性と関係を持ち、その結果女性の不幸を招く点で、光源氏の後に現れる〈衰退した〉〈色好み〉の男君と一致する。つまり、右大将が〈反〉〈色好み〉の男君なのに対して、兵部卿宮は〈衰退した〉〈色好み〉の男君なのである。

兵部卿宮は、苔衣中宮に思いを寄せ告白するが、苔衣中宮はこれを拒絶し、兵部卿宮の同母兄である東宮の妃となった。兵部卿宮は、東宮妃に対して密通を犯し、子を孕ませた。〈密通〉というモチーフは、従前の王朝物語から脈々と引き継がれてきたものであり、兵

部卿宮が〈色好み〉的要素を継承していることの証左にもなる。

従来の物語において、〈密通〉は、多くの場合、子の苦惱や王権の問題と結びつくなど、物語の根幹に強く影響を及ぼすモチーフであった。しかし、本作では、〈密通〉は皇統にも影響を与えておらず、物語の展開を左右するものとして有効に機能していない。

本作が「密通」モチーフを特異な形で物語に取り込み得た背景を探ってみた。東宮参嫁を目前に控えた苔衣中宮の思は次のように描かれる。

「いづれも同じ御事なれど、さるべきさまに宮・上も思し掬て給へるに、かやうのことも漏り聞こえては、いかに思はずに心得ず思されん」とむつかしうわびしう思すなるべし。(冬・二二二)

苔衣中宮は、同母兄弟の東宮と兵部卿宮のどちらに嫁いでも同じことと認識している。女君が一貫して兵部卿宮の思いを拒み、東宮への参嫁を急ぐのは、「なほいと思はずに疎ましかりける御心かな。幼くより互に限りなく実の妹背のやうに頼み聞こえたるに、かく心の隔てありてうち解けにくく思ひきこゆるもいとあやなし」(冬・二二二)と示されるように、兄妹同然に育ち、心を許していた兵部卿宮に思いを寄せられていたことへの衝撃と不快感による。東宮への参嫁は、育ての親である藤壺中宮と帝の意向だから従うというだけで、東宮への愛ゆえに兵部卿宮を拒むというのではないのである。苔衣中宮が東宮に参嫁したことで、兵部卿宮は諦めざるを得なくなるが、彼は苔衣中宮を犯し、妊娠させる。そして、表向きは東宮

と苔衣中宮の子として誕生した若君は次のように描かれる。

<sup>A</sup>兵部卿の宮の御顔を写し取りたるやうなる男宮にてぞ差し出で給へる。<sup>B</sup>誰も誰も思し寄るべきことならねば、(中略)  
<sup>C</sup>「さし越して似給へるこそ」と慈しみきこえ給ふに、中将の内侍ばかりぞ思ひ合はすること紛れ所なければ、人知れずあはれに見奉りて涙こぼれける。(冬・二二二)

若君は、実の父親である兵部卿宮を写し取ったような容貌であった(傍線A)。女君は東宮に事実が露見することを恐れるが、若君を見た人々は、「誰一人としてその秘密に気が付くはずもない」とされ(傍線B)、人々は「若君は東宮を飛び越えて兵部卿宮に似ているのだ」と思っている(傍線C)。不義の子である若君は、事実を暴くかのごとき容貌で生まれてくるが、結局この秘密は、東宮と兵部卿宮が「同母兄弟」であることで、人々になんの違和感も抱かせることなく隠し通される。

さらに、兵部卿宮自身の容貌についても、

<sup>(兵部卿宮)</sup>今宮の御うつくしき、何のあやめも見ゆまじきほどなれど、限りなし。御叔父の中納言殿によくおほえ給へる。(夏・八二)

と、苔衣中宮の父・右大将との酷似が語られている。若君は、父の弟だけでなく、母方の祖父にも似ているということになり、密通はより強固に秘匿されるのである。

その後も東宮は若宮の秘事を知ることがないばかりか、兵部卿宮

との関係も良好で、最終的に若君は立坊する。中古の王朝物語では、密通によって生まれた不義の子が即位する場合に、皇統の乱れという問題が発生していた。これについて、岩佐理恵氏は次のように述べる。

密通は、密通した本人の超人性を物語り、それによる現実的な栄華もまた、物語内で本人に返ってくるものである。また、実在する皇室への配慮からか、皇統の血の乱れは致命的な乱れには至らない。乱れた場合にも、きちんと物語内で、その血の乱れは正されたり、辻褄の合う形にされたりしている。つまり、主人公に利益をもたらすためにだけに機能するものともいえる。<sup>15)</sup>

確かに、『源氏物語』の光源氏と藤壺の密通によって生まれた子の冷泉帝は、自らの出自を知って、実の父より先に即位することへの抵抗から、光源氏を太上天皇としていて、光源氏は密通によって権勢を極めたと言える。また、在位中の冷泉帝には子が生まれず、朱雀帝の子である今上帝に譲位しており、皇統の血筋は正されている。『狭衣物語』では、狭衣大将と女二宮の密通によって生まれた子が、女二宮の母・皇太后の子と偽装されることで、東宮となっている。その父にあたる狭衣大将は、神託によって天皇に即位しており、結果的に狭衣大将は栄華を極め、皇統の血統も狭衣大将の即位によって正されている。

しかし、本作では兵部卿宮の地位は最後まで上昇することはない。また、『源氏』や『狭衣』においては、「父を臣下にしたまま即位することはあつてはならない」という暗黙のルールが共有されていた

と推察されるが、『吾の衣』では、兵部卿宮の即位が取り沙汰されるどころか、兵部卿宮は若宮の実の父であることさえ物語内部の人々に知られることがないまま、死去してしまうのである。

本作における〈密通〉のモチーフの特殊性は、密通により生まれた皇子の立坊が皇統の血筋を乱していないことにある。若衣中宮が「同じこと」と述べているように、東宮と兵部卿宮は同母兄弟であつて、その血は全く同一である。従つて、密通による不義の子であつても、皇統を乱すことがないと言えるのだ。このような事情ゆえに、本作では不義の子が皇位を継承しても、修正の必要がなかったと考えられる。

兵部卿宮による〈密通〉は、彼の〈色好み〉的要素により導かれる行為だが、本作における〈密通〉というモチーフは、皇統を乱さず、妻を犯された夫の葛藤や不義の子の苦悩を誘発することも期待されていない。つまり、物語を推進する機能を持っていないのである。

皇統に連なる兵部卿宮は、〈密通〉によつて、光源氏のように権力を得るわけでも、狭衣大将のように王権を獲得するわけでもない。これに対して、はからずも皇統に血筋を残したのは、右大将である。右大将は、兵部卿宮の死霊を調伏し、娘・中宮と孫の未来を安定させ、皇統に血を残した点で勝者となった。しかし、右大将が、若宮の母が若衣中宮であり、父が兵部卿宮であることを一切把握していないという点は注意される。右大将は決して自らの血を皇統に残す為に娘を守つたのではない。調伏の後も彼は事情を知ることはないし、家族に素性が露見する前に立ち去つて、山に戻っている。

兵部卿宮は、その〈色好み〉性ゆえに密通を犯すが、従来の〈衰

退した」色好み〕型の物語の男君たちのように、権力や王権を獲得することはできない。本作において、「衰退した」色好み〕の兵部卿宮は、「反」色好み〕の右大将に調伏され、右大将の血を王権へ流入させる役割を果たす。本作では、「反」色好み〕が従来の「色好み」を超越するのである。

右大将と兵部卿宮は、容姿が酷似するだけでなく、それぞれの子が誕生した日付も一致している。この二人の男君の造型は明らかに類似しているが、その恋の結末は対極的だ。この二人の恋が、何故正反対の展開を迎えているのか、二人の相違点を検討したい。

両者は、ともに母方の従姉妹にあたる女君に思いを寄せている。異なるのは、右大将と姫君が、あくまで血縁の上で従姉妹であるだけなのに対して、兵部卿宮と苔衣中宮が「実の妹背」のように育てられていることである。苔衣中宮は、母・西院姫君の死により、藤壺中宮に託され、その所生の東宮・兵部卿宮とともに育てられた。兵部卿宮からの告白を受けた苔衣中宮は、「実の妹背」のように育った兵部卿宮が自分に対する恋心を隠していたことを、心外でいやらしく、恐ろしいと思っている。苔衣中宮の強い拒絶は、「実の妹背」のような関係で育ったという背景が大きく関係していると考えられる。

一方、右大将の妻・西院の姫君も、早くに母を亡くして継母に育てられた。その継母は父・右大臣の正妻（東院の上）であるが、母（西院の上）がその死の間際に、娘を託そうとしたのは、実の姉・前斎宮であった。西院の姫君の継母は、母の死去後に、東院の上が名乗り出たことで決定している。もし、この時に東院の上が名乗り

出ず、西院の上の遺言の通り前斎宮が継母となっていた場合、姫君は幼少期を右大将と「実の妹背」のように過ごしたはずなのである。東院の上が姫君の継母となったことで、右大将と姫君の「実の妹背」のような関係は回避された。苔衣中宮が姫君と同様の継母を持ってなかったのは、右大臣が二人の妻を持っていたのに対して、右大将は生涯一人の妻しか持たなかった、という造型の違いによるところが大きい。ここにおいても、男君の「反」色好み〕性が物語の展開に強く作用しているのだ。

右大将と兵部卿宮は、意図的に類似した造型がなされている。しかし、二人の恋の結末は対照的である。よく似た二人の男君が異なる結末を迎えることにより、「反」色好み〕型の右大将と、「衰退した」色好み〕型である兵部卿宮の人物像の対比は、より明確なものとなる。また、女性を幸せにしない「色好み」のあり方を、「密通」モチーフの無効化を通して否定し、さらに、新しい「反」色好み〕的人物によって「色好み」は超越されている。その構造にこそ、この物語の意義が込められているのではないか。第二世代と第三世代の関連性や、物語が八十年にわたることの意義については議論されてきたが、この問題は二人の男君の対照性に着目することで解明できると思われる。

#### 四 おわりに

以上、検討してきた通り、本作は従来の王朝物語と恋のとらえ方が大きく異なっていることがわかる。主人公である右大将は「反」色好み〕的で道心深く、権力志向からも逸脱して、一夫一妻という

特異な男女関係の形を完遂する。彼らは、世俗的な権力生産の構図に組み込まれることもなく、ただ一人の男が一人の女を一途に思うことに完結しているという点で特異な性格を持つ。そんな「反」色好み」的な男女の恋と、それが仏道への機縁となることを、この物語は「苔の衣の御仲らひ」として最上のものと据えているのである。続く第三世代の物語は、「衰退した」色好み」型の兵部卿宮との対比により、苔衣右大将の物語の特異性をより明白にしている。従前の物語から継承された「衰退した」色好み」や「密通」、妄執といったモチーフは、物語の中で無効化され、「反」色好み」で道心深い男君・右大将の調伏によって超越される。「苔の衣」は、「反」色好み」的恋物語という新しい恋物語を誕生させると同時に、それが従来の恋物語を超越するものとして描いているのである。

『苔の衣』の成立時期は、関本真乃氏が、

遁世の流行は、社会現象とも言えるうねりと勢いを有したものであったと言えよう。(中略)

単に出家を遂げるのみではなく、再出家、もしくは出家し山林に離れて独り仏道修行に励むさまが称賛されているのである。(中略) 出家遁世したとしても、名利・名聞の一切を捨てて行方知れずになる者は少なかったと思われ、それゆえに、完全に遁世を遂げた人々は、尊崇の対象となったのであろう。<sup>10)</sup>

と述べているように、仏教的な事象に対する関心が非常に高かった時代でもあった。王朝時代の終焉に伴う変化の中で、恋のあり方も、その価値観も、非常に混濁した時代だったのではないだろうか。そ

うした時代背景をもつ、『苔の衣』は、時代の機運の仏教的な側面に呼応した恋物語を生みだし、「反」色好み」という新たな形を打ち出した点で大きな意味を持つのである。

注1) 神田龍身・西沢正史編『中世王朝物語全集・御伽草子事典』(勉誠出版 二〇〇二)

(1) 同じ。

(2) 神野藤昭夫著『散逸した物語世界と物語史』(若草書房 一九九八)

(3) 豊島秀範『物語史研究』(桜楓社 一九九四)

(4) (1)に同じ。

(5) 今井源衛校訂・訳注『中世王朝物語集 7 苔の衣』(笠間書院 一九九六)

(6) 「かくばかり思し染みにける御心地この世ひとつならず尊く侍れど、

かかる身にだに忍び難く侍る山下ろしの險しき、苔を衣として風を防ぎ

てのみ過ぎ侍る身一つだに悲しく候ふに」(秋・一八七) / 「いみじからん綾羅錦繡にも苔の衣・岩の枕はこよなく替へ優りに侍りぬべけれ」

(秋・一八八) / 「色々に染めし袂を今はとて苔の衣にたちぞ替へつる」

(秋・一八八)

(7) 岡見正雄・板倉篤義編『角川古語大辞典 第一巻』「色好み」項(角川書店 一九八二)

(8) 「源氏の色好み」「色好み論」折口博士記念會編『折口信夫全集 第十四卷』(中央公論社 一九五五)

(9) 中村真一郎『色好みの構造—王朝文化の深層—』(岩波書店 一九八五)

(10) 神野藤昭夫『中古文学研究叢書 6 散逸した物語世界と物語史』「苔の衣」の方法と特質」(若草書房 一九九八)

(11)

- (12) 引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男注訳『新編日本古典文学全集20 源氏物語①』（小学館 一九九四）に拠る。
- (13) 『伊勢物語』『源氏物語』『とりかへばや物語』等には〈家〉の問題と恋物語が並行して語られ、物語の根幹に関わる。
- (14) 引用は、植木雅俊訳『梵漢和対照・現代語訳 法華経 下』（岩波書店 二〇〇八）に拠る。
- (15) 岩佐理恵「『苔の衣』の兵部卿宮——中世王朝物語において登場人物の子孫が帝位に即くこと」（『人間文化創成科学論叢』13 二〇一一・三）
- (16) 関本真乃「『苔の衣』冬巻と通世」（『京大文学論叢』36 二〇一六・九）

## 受贈雑誌(一)

金沢大学国語国文 かほよとり	金沢大学国語国文学会 武庫川女子大学大学院文学研究科・日本語日本文学専攻院生研究会
岐阜聖徳学園大学国語国文学 京都教育大学国文学会誌 京都語文 京大文学論叢	岐阜聖徳学園大学国語国文学会 京都教育大学国文学会 佛教大学国語国文学会 京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室
キリスト教文学研究 金城日本語日本文化	日本キリスト教文学会 金城学院大学日本語日本文化学会
近代 近代文学研究 群馬県立女子大学国文学研究 藝文研究 言語の研究 言語表現研究 現代短歌 現代日本語研究	神戸大学「近代」発行会 日本文学協会近代部会 群馬県立女子大学国語国文学会 慶應義塾大学藝文学会 東京都立大学言語研究会 兵庫教育大学言語表現学会 現代短歌社
神女大国文	大阪大学大学院文学研究科 日本文学講座現代日本語学研究室 神戸女子大学国文学会